

令和2年度 第2回教育課程編成委員会

日 時：令和3年3月26日(金) 20:00～21:00

場 所：長崎医療技術専門学校 会議室

出席者：長尾 博、松本逸郎、西 啓太、有福浩二、大坪 建
章 傳春、荒木一博、林勇一郎、岩永隆之、早野和之

欠席者：分部哲秋

座 長：章

1. 出席者紹介

2. 校長挨拶（代理：章）

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策を行いながら、授業方法やカリキュラムの工夫が大変だったと思う。今後も先が見通せない状況であるが、皆さまからのアドバイスなどをいただきながら、次年度の計画に反映させたいと思う。

3. 前回会議後の報告

岩永) 前回は学内実習についてご意見を頂いたが、臨床現場の先生に来校してもらうなど難しく実現できなかった点もあった。結果的には、3年生の1期が緊急事態宣言と重なり前半の4週間は全員が臨床実習に出れなかった。2年生の9月末からの実習についてはPT学科5名が学内実習という形をとった。今回1月末からの実習については、長崎県独自の緊急事態宣言が発令されたため、実習開始期間を遅らせ、4週間の予定を3週間で受け入れていただいた。その結果、PT学科40名中13名、OT学科25名中11名が学内実習となった。1年生の見学実習は中止とした。

学内実習の内容は、基本的に臨床実習と同様の目標とし、次のステップへ繋げることとした。しかし現実的に対象者に触れることができないため、逆に学校でしかできないことを深めていこうと考えた。症例がベースであったとしても、そこから臨床推論、原因や意義をしっかりと考えさせ、必要な基礎知識・技術を確認し再学習をしっかりと行うようにした。OT学科ではPBL(問題解決型学習)で課題を与えながら解決していくアクティブ・ラーニングを意識しながら組み立て進めていった。基本的に各学生に教員が付き、少人数制でその学生に合った指導ができたので、比較的達成感や満足感が高く、改めて理解を深めることができたようである。中には臨床実習で消化不良を起こした学生からは、次もし機会があれば学内実習でやり直したいという意見も聞かれた。

症例ベースに解剖学・運動学や評価の意義などを振り返りながら取り組んだが、それだけでは足りないと考え、長崎リハビリテーション病院様に協力をいただき、リモートで事例を通して現場の理学療法士や作業療法士と学生でディスカッションを行う場を設けることができた。素材としては、具体的な対象者の症状が動画になっている「症例で学ぶ脳卒中のリハ戦略」(医学書院)を用いた。本に掲載されている基本的情報をもとに治療の考え方を学び、不足点や考え方を現場スタッフや教員が示し、学生がどう捉えていくか取り組んだ。学生はグループに分かれ、講師にはリモート画面で学生の取り組み状況をみていただきながら、考え方を伝えたり、ディスカッションを行った。

結果としてはよい取り組みになったと思うが、準備を含め教員の負担は大きいものであり、今後の課題ではないかと思う。

4. 開 会

章) 本委員会は第6条の規定により出席人数を満たしており成立していることを確認する。

5. 委員長選出

章) 委員長は章が代行する。

6. 審議事項

1) 学内実習の影響について

章) OT学科教員が認定を取るための研究として「学内実習 満足度アンケート調査」を実施した。今回は要点を絞って資料を作成している。

令和2年度臨床実習Ⅱ・2期(3週間)の終了後に実施した。対象はOT学科2年生で、対象群は学内実習群(11名)と臨床実習群(14名)である。アンケート項目は①基本態度、②評価、③作業療法管理で、それぞれの満足度を答えてもらった。結果としては、基本的態度、評価については有意差がみられなかった。作業療法管理では有意差がみられ、その理由としては、記録文書の管理や他部門との連携、チームの中でのOTの役割、地域における施設の役割など、現場でない経験出来ないものについて差が出ている。

大坪) コロナ禍で見学しかできなかったなどの意見も耳にするが、それによる影響はみられるのか。評価を学ぶことに関して臨床よりも学内演習の方がしっかりできているような印象を受けた。

岩永) PT学科では、対象者の方に接触させていただけることはかなり限られることが多く、9月の実習では指導者の手の上から対象者に触れる形をとった施設もあった。数名の学生は見学だけにとどめられる制限もあったように思うが、学内実習の学生から見ると「対象者の歩くところは直接見れる」という羨ましさはみられた。

大坪) 指導方法として、従来型であれば実習開始すぐに対象者の評価に入れたと思うが、今の指導法であれば見学・模倣・実施の流れであれば、3週間という期間では余計に対象者に直接触れる機会や質とかに影響があるのではないか。

岩永) 学生は自分たちのレベルに合わせて学んできているところではあるが、指導者側も診療参加型に意識を持っていただいている印象はある。ただ結果としては、以前に比べ対象者に触れる機会を得る学生の総数は減っているかもしれない。反面、臨床実習指導者講習会にもある「学生のレベルに合わせて」という視点でみていただいている分、消化不良にならないよう配慮していただいている印象がある。従来型の自分で考えるなどのやり方と比べ、混乱している学生の数は減っているのではないかと感じている。一長一短の部分もあるかもしれないが、学生のレベルを判断していただいて、そこに合わせた参加をさせていただいている。診療参加型になりまだ間もないこともあり、探りながら取り組んでいるところである。

林) 経験する対象者数が少なくなっている傾向も感じるが、逆に多すぎるような時もあると感じている。例えば、助手として存在するスタンスとなるので、以前は数名の担当症例のみでよかったが、今は指導者のそばに付くので、指導者が担当する患者すべてをみることになり症例レポートが増えてしまうというケースもある。この現象は、現在の指導方法と従来型の考え方が混在し

ていることによるものと考え。一番気を付けることは、無資格診療をやらないことが主にあるので、何をやらせていいのか、何をやらせてはいけないのかという水準を守ることと、その理解が臨床の現場では把握できていないのではないかと思う。もう一つハラスメントという点もあるが、教員もしっかり意識している点であり、すごく改善された。逆にもう少し厳しく指導してもらってもいいと感じる時もある。どちらかという、指導方法の勘違いや水準の理解について、協会や養成校がしっかり伝えないといけないのではないか、その点が指導方法のバランスが悪くなる原因ではないかと感じている。

大坪) 受ける側が指導方法等を熟知しないと、今後の実習が進めにくくなるのではないかと周りを見てても感じる。学生の問題だけではなくて、受ける側の問題も大きいのかなと思った。

岩永) 先日 PT 協会から臨床実習の手引き第 6 版が送られてきて、その Web 版を HP に掲載するという情報があった。その中で、指導者の表現を CE(臨床実習教育者)から「臨床実習指導者」へと変更されたり、水準についてもしっかりと表で示されるなどの改革があっている。落ち着くまで何年かかるかわからないが、移行していく。

西) アンケートは学生の満足度となっているが、今後さらに広げていく流れはあるのか。

韋) まだその先は考えていないようである。

西) 指導者側の満足度や、就職先の指導者係にも行ってもよいのではないか。コロナ禍もいずれ終わると思うが、今回の経験をもとにさらに実習を提供していくためには、学生の満足度では判断できないのではないかと感じる。ぜひデータを出していただきたいところである。

韋) コロナ禍で卒業を迎えた学生は、今後の卒業後教育にどのような影響が出るのか興味のあることではある。

長尾) 今日の話は教育心理学では非常に勉強になる内容である。コロナ禍はいつまで続くかわからないが、解決した場合はそのような教育が波及するかどうかかわからない。昔から医療というのは直接経験して治すことがベースである。最近、アメリカの教育心理では、観念というか頭の中で知識を植え込んで医療に活かすという考え方がある。リモートで感覚的にこういうものをするということを頭の中に植え込むことで解決できるであろう。

アンケート結果では、学内実習群と臨床実習群に有意差はないと言っているが、統計的にいうと検定数が少なく 100 名以上のデータがなければ U 検定は適していない。しかし、③作業療法管理では有意差がでたということなので、本格的にやればものすごく差が出るのではないかと感じる。なので、理想は経験である。コロナ禍で経験が出来なくても、リモートで行うことで効果があるか、卒業しても通用するものなのかを調べる一つのチャンスなのではなかろうか。

質問だが、国家試験の合格率が高くなったとのことだが、合格率とリモートとの関連はあるのか。関係があるとしたら、リモートの方が効果あるということになるのだが。

林) 3 年の担任をしていたが、国家試験対策についてはリモートで対応したことはない。緊急事態宣言で自宅待機期間にはリモートでデジタル化した問題を解かせたことはある。それは、国家試験をあまりイメージできていない時期であったため、国家試験勉強にはあまり役には立っていなかったように思う。実際は、対面して声に出して行うアクティブ・ラーニングを意識させ、分かったことは調べて相手に伝えるという主体性を引き出すやり方をしっかりと取り組ませたことで効果が上がったと思う。また、少人数のクラスであったことも要因だと考える。

長尾) 直接的には、学内実習との関連はないと考えてよろしいか。

林) 今回3年生は実習に行けているので、あまり関係はないと考えられる。

長尾) コロナがなければできなかった貴重な体験だと思う。

松本) コロナ禍になり、せっかく大学に入学したのに通信教育ばかりだと首都圏では言われている。特に座学の場合は、学校に行くことがモチベーションを維持するのに大事であった。文部科学省も当初はリモートを推奨していたが、対面も取り入れるようにと変化してきた。

私の担当科目は座学であり、1年生の前期はずいぶんと混乱をした。準備も大変となり、広い部屋では板書の文字が見えないなど、学生もつらかっただろうし、手探り状態であった。その結果、前期定期試験では成績のピークが2つ現れた。一つ目のピークは、それまでの経験などの蓄積があり、どのような形態であれ学習できるものと考えられる。もう一つのピークは、ずいぶん下の方にあり、これを立て直すのは非常に難しいと考える。そのピークは後期になっても現れており、その学生たちが2年生になり、座学から少しずつ離れて実習に臨みだしたときに、そのころのモチベーションを失くしていくのだろうなと感じた。あまり留年させられないという現状もあるのだろうが、克服していかなければいけない問題である。

座学の方ではリモートも可能なはずだが、教科書の中にQRコードが掲載されており、各自のスマホで動画がみられるものが増えてきている。ただ、時間に追われて説明を十分に行う事が出来ないなど、非常に難しいなという意識をもった。百聞は一見に如かずというが、どこが問題なのか、着目点はどこなのかを伝えないと、ただ見ているだけになりあまり効果が出ない。

先ほどの病院スタッフとのリモートでは、着目点や検討内容などをきちんと示し対応されており、そのような状況で観ることは重要であると感じた。視覚的に提供されることは重要であり、ポイントごとに行われれば、悪くないという印象をもった。

活水大学の幼児教育では、幼児の行動を見ながら問題などを考える手法を取り組んでおり、参加したことがある。しかし教育者が見る視点と私の視点の違いがあり、見せればいだけではなく、何が問題かを的確に示すことが大事だと感じた。

行き先が見えない現状だが、リモートという新しい手法も用いながら学生一人一人に対応されたのはすごいことだと感じた。

岩永) 何度かの打ち合わせをしながら取り組んだが、講師の方々も取り組み方を考えていただき、不足する情報の部分は作成していただき、最終的な着地点を示していただいた。多くの労力を使いながら取り組んでいただけた。

7. 総評・謝辞

章) 学生は、我々が実習先の確保で奔走していることや、臨床に行けない学生には学内実習を用意している姿も見てくれており、当り前のように行っていた実習が当たり前でなかったことを感じてくれたと思う。実習期間も短くなったが、その分丁寧に実習に取り組んでいた感じである。いい効果につながったのではないかと考える。

データのとり方へのアドバイスや、今後調査を続けることの重要性などのご意見をいただいたので、いろいろな取り組みへの効果を検証し、有効性を示していけたらと思う。

本校としては、これからもいろいろな取り組みを行っていきたいと考えているので、ご指導・

ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

8. 閉会

章) これをもちまして、令和2年度第2回教育課程編成委員会を閉会する。